

溶連菌感染症の話

米の山病院小児科部長 田島 重吉

はじめに

溶連菌感染症は春先や秋にはやりますが、小児ではとても注意が必要な病気です。

それは、溶連菌感染症をきちんと治療しないと、急性腎炎・アレルギー性紫斑病・リウマチ熱などの合併症を起こすことがあるからです。溶連菌は、細菌なので、きちんと抗生剤をのむことで合併症の大部分は防ぐことができます。

溶連菌感染症について

1. 感染経路・潜伏期間

溶連菌（細菌）を持っている人の唾を吸い込んでうつりますが、体調の良いときはかかりません。

伝染力は麻疹や水痘ほど強くはありません。発熱・のどの痛みがある時は感染力が強いですが、抗生剤をのみ出して熱が下がれば感染力はなくなります。潜伏期は2～3日です。

2. 症状・経過

多くは寒気やふるえをともなって、突然高い熱がでます。のどが赤く腫れていたり、食欲や元気がなくなります。頭痛・嘔吐・腹痛を訴えることもあります。舌がイチゴのようにブツブツになったり、熱が出て1～2日して首や身体や手足に細かい発疹がでることもあります。熱がさがったあと7～10日して、両手指の皮がうすくむけることもあります。



3. 合併症

急性腎炎：溶連菌にかかって1～2週後に目の腫れや血尿がおこります。

アレルギー性紫斑病：溶連菌にかかって1～2週後に手足に出血斑がでたり、腫れたりします。

リウマチ熱：溶連菌にかかって2週前後に高い熱や関節痛がおこります。

4. 検査・治療

のどの迅速検査をして溶連菌かどうか調べます。溶連菌がでた場合は合併症を予防する為に抗生剤を7～10日飲みます。**熱がさがって3～4日で抗生剤をやめると再発して、合併症を起こしやすくなりますので、きちんと飲んでください。**抗生剤を飲み終わって2週後に診察と尿の検査を受けてください。

5. 家庭での看護

発熱には、アイスノンや解熱剤を上手に使ってください。食事は吐きやすくなるので、消化の良いものを与えてください。

6. 外遊び・入浴・登園・登校

熱が下がって2～3日して、食欲・元気がでてきたら、入浴させて保育園や学校にだしてください。

抗生剤をきちんと飲んでいれば、外であばれても合併症はほとんどおこりません。